第3期広島市立大学塾活動報告【11月27日】

国際学部2年

神津 圭佑

長島愛生園歴史館の学芸員である田村朋久さんから「人権が尊重される社会のために～ハンセン病問題から学ぶ～」というテーマで講演をしていただいた。ハンセン病の医学知識から患者に対する民間の意識、誤解と偏見、そして愛生園について分かりやすく説明していただいたため、ハンセン病の正確な知識を得ることができた。

田村さんの講演の中で印象に残った話を紹介したい。長島愛生園に在園する人の平均年齢は86.4歳、そして平均在園年数は61.4年であるとおっしゃっていた。人生の半分以上を療養所で過ごしているのだ。私はその後聞いた理由に何とも言えない感情を感じた。差別だ。「無らい県運動」によりうつりやすく恐ろしい伝染病だと考えられた結果、差別され家族にまで見捨てられた人々がいたのだ。誤解と偏見は患者を社会との断絶に追いやった。ある日突然連れていかれた場所は社会的に二度と出ることのできない場所であった。私はハンセン病患者に対してなんて不憫な人たちなのだと思ったが、田村さんはこうおっしゃっていた。かわいそうな人たちではなく、強く生きていた人たちだと。確かに見せていただいた映像の中の人からはたくましさを感じた。差別されても後遺症が残っても強く生きていた。小さなことで悩んでいる自分が馬鹿らしくなった。

ハンセン病問題とは誤解と偏見が招いた人権侵害である。国の政策が間違っていたのは確かだが、情報を鵜呑みにしたのは国民である。人権が尊重される社会のためには正しい知識をもつこと、そして自分たちの問題として真剣に考えること、それらが大切であると田村さんの話から学ぶことができた。